



「セカンド霊園を買いたいんだけど……」。本欄の愛読者である年上の知人から相談を受けた。「セカンドハウス」とか「セカンドカー」なら聞いたことがあるが、「セカンド霊園」というのは初耳である。聞けば、その人の造語らしい。

遠く離れた実家の菩提寺には先祖代々の墓がある。昔からの檀家として「身じまい」するわけにはいかない。でも、遠いと墓参りする子供がかわいそう。そこで寺の墓は残したまま自宅近くの霊園と契約したいから、何か気の利いたアドバイスを、という相談だった。

石材店の3代目社長で、世界45カ国を回った長江暉子・聖徳大教授に話を聞きに行く。最近、その種の相談は多いという。

墓はもともと、子供が、亡くなった親のためにつくった。ところが首都圏では墓不足が深刻になり、寿陵（生前に建てておく墓）が増えた。バブル崩壊前には新しい墓の7割を占めたという。その後、従来の死後建墓の形に戻ってきたが、団塊世代が高齢化するにつれ、再び、「自分の墓は自分で」の動きがあるらしい。故郷の墓を整理する「身じまい」が増える一方で、団塊世代が、実家の墓はそのまま残して新しく建てる「セカンド霊園」をブームに押し上げて

「セカンド霊園」という選択も

いるのかもしれない。
では「失敗しない霊園選び」のポイントは――。

△形態▽

「公営霊園」「民間霊園」「寺院墓地」の3種類があるが、首都圏ではこの順に人気が高い。「墓を買う」と言つが、実際は「土地の永代使用权」の購入のこと。だから「永代使用許可証」などの書類はきちんと保管しておく。寺によっては出ないケースもある。チラシを見る時は、価格は土地使用権だけか、墓石の代金も入っているのかの確認を。「宗教自由」は「それまでの宗教は何でもいい」という意味の場合もある。契約後に特定宗派の法事を求められることがないか、注意したい。

△墓石▽

高級石材と中国産の安いものとの間には、15倍ほどの価格差がある。安いのが粗悪というわけではないが、自分の予算と好みをはっきり業者に伝える。なるべく2〜3社から見積もりを取るのがいい。

△管理料▽

公営は安い。ガーデンング墓地などは手がかかる分高くなる。民間霊園が高めなのは公的補助がなく受益者負担のため仕方ないが、安ければいいというものでもない。管理料と墓数をかけてみれば、その霊園の大きな管理費用がわかる。本当にその額で通年の管理ができるのかチェックしてみる。

「団塊世代の、特に男性は自分ひとりでがんばりすぎ」と長江先生は言う。「介護を受けることも見据えて、病院・施設や墓は、子供が入ついでに、毎日でも通える距離にあるのがいい。家族みんなで下見をしながら話し合っってほしく」